

# 満州族の経済生活

—愛新覺羅王族の後裔たる村の事例研究から—

楊 紅

## はじめに

中国は56民族を有する多民族の国家である。その中で、満州族の人口は1千万人（2000年の人口国勢調査）、中国55少数民族の中でチワン族に次いで第2番目の規模である。調査村の腰站村に暮らしている村民の一部は清朝愛新覺羅王族の支系に属しながら、農耕民として300年あまりの歴史を歩んできた。彼らの生活様式が何であろうか。筆者は2002年から現在までその村に繰り返して調査を行なった。現地調査に基づき、中国東北部に位置する満州族の一山村（腰站村）の生業経済を紹介することが本稿の意図である。

本稿では、その腰站村の人々の生業経済が多様性に富む点を指摘したい。腰站村は山あり、川あり、平野ありの世界である。このような多種多様の自然環境に恵まれ、畑と水田の耕作を中心とした伝統的な農業の他、家畜飼養、林業、農産品加工業、運輸業、建築業、養殖業、商業、観光業などの生業経済が存在する。このような多種多様の生業経済の背後に中国社会環境の歴史変遷を具現化しているといえる。すなわち、文化大革命時代（1966～1976年）までに、腰站村の生業経済は主に単一の畑と水田の耕作のみの農業を主としていた。文化大革命以降の1980年代改革開放に伴い、中国政府は生産責任制や市場経済の実施によって、腰站村の生業経済は多元化するようになった。そこで、本稿は、腰站村の自然環境、土地所有制度、生業経済について検討することによって、当村の生業経済の変遷の過程を明らかにする。

満州族は清王朝を建てた重要な民族であるにもかかわらず、清王朝崩壊後、満州族の文化に関する研究は本格的に行なわれていない。日本の歴史研究者である和田清（1955）が指摘したように、満州は極東の辺すいにあつて、世界の片田舎

であった。中国でも満州は歴代「化外の地」であって、学者の注意を惹くことは稀であった。辛亥革命（1911年）以後、中国社会の変動は大きく、そのたびに多かれ少なかれ文化に損失を与えた。特に、文化大革命中は少数民族の独自性を強調することを避けるため、中国政府によって、数民族のほとんどの古い習俗が取り除かれた。しかし、文化大革命以降、中国政府は、改革開放政策が行われるにともない、1982年の新憲法の中には、民族間の平等と民族風俗習慣の維持の保証を明言した。それによって、中国諸民族の伝統文化に関する研究が再開された。このように、満州族に関する諸研究は1980年代から邁進している。その中で、中国人研究者である金啓孫の『満族的歴史與生活—三家子屯調査報告』（黒龍江人民出版社、1981）があげられる。また、張曉琮、何曉芳『満族—遼寧新賓県腰站村調査』（2004）は貴重な研究で、小論に大きな示唆を与えた。

## 1. 自然環境

### 1-1 地形

#### ① 新賓満族自治県

新賓満族自治県は、遼寧省の東部の山間地帯に位置する満州族の集住する県であり、「煤都」と呼ばれる石炭の街撫順市に属している。1984年に中国政府の民族区域自治法が制定されたことによって、1985年1月17日、新賓県から新賓満族自治県となった<sup>1</sup>。新賓満族自治県は全国初の満州族自治県である。当県の総人口は308,000人であり、そのうち、満州族の人口は75%を占める。

新賓満族自治県の面積は4,432平方キロメートル（九州ぐらい）であり、255村からなっている。土地面積の内訳は、中低山地が72.9%、丘陵が15.9%、平原が8.9%、川などが2.3%となっている。平均海拔は492メートルである。

#### ② 腰站村

腰站村の位置は新賓満族自治県の北部上夾河鎮の中部にある。この村は清代の皇帝が興京（新賓満族自治県の旧称）にある祖先の陵墓を祭るときに必ず通る宿駅であった。当村の位置は、撫順市に60キロ、新賓満族自治県の首府である新賓鎮に61キロの距離である。村はその撫順市と新賓鎮のほぼ真ん中に位置するこ

とより、「腰站」、すなわち「中間駅」と呼ばれるようになった。当村は、東崗、西崗、周家溝の三つの居住区に分かれている。

腰站村の南北に山に囲まれており、平原は少ない。村の北側には海拔4～500メートルの蓮花山がある。一本の小河が蓮花山の麓から村の中を経て南の五竜河に流れ込む。五竜河が村中を静かに流れており、灌漑水源となっている。五竜河を越えてさらに2～300メートルの丘陵がある。このように、腰站村は、水も豊かで、山もある場所であり、同じ遼寧省の西部の大平原地帯で生まれた筆者にとっては、桃源郷のような世界である。

### 1-2 気候

腰站村の気候は乾季と雨季が明瞭に分かれる大陸性気候型である。四季を通じて変化を見てみると、年降雨量は800ミリであり、雨は5～9月に集中する。春（4～5月）は雨水が多い。夏（6～8月）は暑くて多雨である。秋（9～10月）は晴れる日が多く、霜が多い。冬（11～翌年3月）は厳寒で長い。年間平均気温は5.5℃（あるいは4.6℃）である。そのうち、春の平均気温は10.7℃、夏の平均気温は20.7℃、最高気温は7月の22.3℃である。冬の平均気温はマイナス9.5℃、最低気温は1月のマイナス16.9℃である。冬の降雪日数が約36日、積雪日数が約105日である。日照時間が年1200百時間、霜のない期間が132日である。当村は、半乾燥地域（500～1000mmの地域）に位置し、雨量がやや少なく、昼夜の気温差、夏と冬の気温差が大きい。基本的に農作物の成長に適する。村では台風や旱魃の自然災害が生じたことがない。

### 1-3 人口

現在、腰站村では清朝皇室愛新覺羅の一分枝の子孫、409人が暮らしている。愛新覺羅（現在肇<sup>ちょう</sup>と改称）一族は、最初に腰站村に移住してきたのである。この一族の祖先は清朝第一代の皇帝、ヌルハチの曾祖父（福満<sup>ふくまん</sup>）第三子索長阿の子孫の阿塔である。すなわち、かれらは、清朝愛新覺羅王族の傍系である。その愛新覺羅一族の現存の子孫数は、他の土地に移住した家族も含めて、約千人を超えている。

1644年、清は瀋陽から北京に遷都した。しかし、新賓の祖先の陵墓を管理するために、愛新覺羅阿塔は清朝皇帝に派遣されて、1686年に、北京から新賓に赴任

した。当村を通過する途中、この村の風水がいいので、阿塔は六人の息子をこの村に残した。それ以来、村に生活している愛新覚羅一族の子孫は阿塔六人の息子後裔である。愛新覚羅一族は300年あまりの全氏族の家系を記録した族譜を持っている。この支系の子孫は腰站村で、約300年農業を営んで暮らしてきたのである。

かつて、腰站村の愛新覚羅一族は以下の特権を享受していた。1つ目の特権としては、1人の男子が誕生すると、清朝政府から24両白銀と皇室の傍系として象徴の赤帯（皇族の直系は黄色の帯）1本を受領した。2つ目の特権としては、その一族は蓮花山の麓には愛新覚羅一族の専有墓地を持った。現在では、その墓地には現在でも他の氏族の人々の埋葬することは許されない。

### ① 人口登録の変化

2003年5月30日までの統計によると、腰站村の総人口1,193人の中で、満州族の人口は1,019人、総人口の約86%を占める。当村の世帯数は324戸のうち、満州族は304戸である。その中で愛新覚羅の一族は109戸、409人である。

当村の人口と民族構成は1949年から2000年までの間に下記の表1のように変化している。

表1 腰站村の人口登録

年	総合数		漢族		満州族		朝鮮族	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
1949	157	817	35	175	122	642		
1959	170	785	60	300	110	485		
1964	209	981	80	410	129	571		
1969	296	1281	156	630	130	651		
1979	279	1240	91	421	188	819		
1982	302	1242	54	188	248	1054		
1984	313	1273	13	50	300	1223		
2000	324	1062	23	76	298	995	0	1

(腰站村『農村基本統計資料台帳により作成』)

当村の満州族の人口登録は歴史的に大きく変遷している。清王朝崩壊後、中華民国時代の漢族による満州族排撃によって、自ら満州族と自称しなくなったものが多い。このように満州族が自民族であることを隠して漢族を登録するものがあった。なおかつ、新中国成立以後、民族の風習などの維持が特に文化大革命において否定されたために、多くの満州族の者が漢族を登録することになった。1949年の新中国成立まで、この村の満州族は122戸、漢族は35戸であった。その後、中国共産党政府の各種政治運動の増加にともない、漢民族の人口は増えるようになった。その一方、満州族の人口は次第に減っていった。

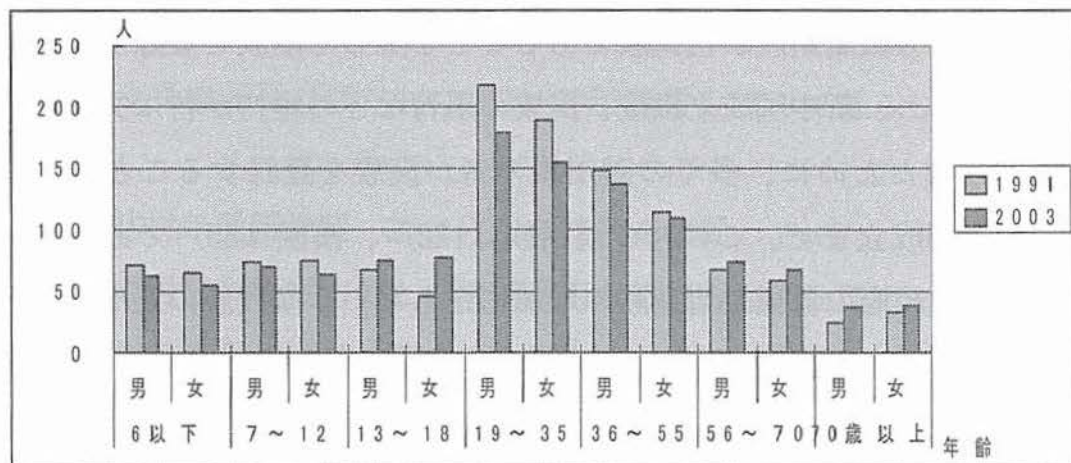
文化大革命（1966～1976年）開始以降、少数民族の出身を隠すために満州族のものは漢民族を変えるものが増えるようになった。1969年の統計によると、漢族世帯数は35戸から156戸に急増した。しかし、満州族の世帯数は122戸から130戸になった。1978年に改革開放政策が始まったが、1979年の人口統計では、全人口の1240人のうち、漢族は91戸、421人で、29.5%、満州族は188戸、819人で、70.5%である。この後、満州族自治県の設立をめざして、漢族として登録していた満州族の者に対しても満州族への登録変更が勧められた。また、漢民族のものは満州族との結婚を通して満州族への登録変更を含めている。その結果、村の全人口の1273人のうち、満州族は300戸、1223人に増加したが、漢族はわずか13戸の50人、村の全人口の3.92%にまで激減した。

また、表1から腰站村の民族構成は主に満州族と漢族から構成することが分かった。その中で、一人の朝鮮族の女性は脱北者（北朝鮮から逃亡）であるが、村の人と結婚して来たのである。その脱北者の女性は2000年の人口国勢調査の際、朝鮮族として登録された。

このように、腰站村の人口登録の変移は各時代の民族政策の変遷プロセスを反映した。

## ② 年齢構成

グラフ1 腰站村における人口の年齢構成



(張曉琼、何曉芳『滿族—遼寧新賓県腰站村調査』35頁により作成)

張曉琼、何曉芳（2004）によると、腰站村の人口構成は1991年に56歳以上の人口は総人口の14.67%、13歳以下の人口は総人口の22.76%、老年と少年の比率は64%であったが、2003年になると、56歳以上の人口は総人口の18.02%、13歳以下の人口は総人口の20.87%、老年と少年の比率は86.35%になった。

現在、腰站村では中年階層が多いので、腰站村は老齡化の社会に入っていくことが推測できる。

## 2. 土地所有制度の歴史沿革

土地は農民にとって農業生産の前提なので、土地所有形態は社会に大きな影響を与える。当村の土地所有制度の変化は中国土地制度の変革過程を具現化している。腰站村の土地所有制度は以下の4つの時期の変化を遂げた。

### 2-1 1949年の中華人民共和国成立以前

1949年の中華人民共和国成立以前、腰站村では土地所有は私的所有が圧倒的な比重をしめ、普遍的な形態であった。私的土地は主に祖先からの継承の土地と新しく開拓した土地である。また、共同所有が全く存在しなかったわけではなく、「族田」という族有のものがみられた。

老人によると、最初に腰站村に移住してきたのは愛新覺羅（現在肇と改称）一

族であった。当時、村の住民はすべて愛新覚羅一族であった。土地は愛新覚羅の人々の私有であった。もともと、愛新覚羅の人々は土地が平均的に分配された。しかし、貧富の分化が生じるにともない、当村の土地が少数の「地主」に占有されるようになった。

## 2-2 1949年の中華人民共和国成立以後

1949年の中華人民共和国成立以後、土地改革が実施された。土地改革の際に、土地所有と農業経営を規模別によって、村人は「地主」、「富農」、「中農」、「貧農」、「雇農」という五つの階級区分に分かれた。その中で、「地主」は、土地や金を貸し、野良仕事、家事のすべては人を雇って行った。村の60%の土地は地主に占有されていた。1戸当たりの地主は約174畝の土地を持っている。「富農」は41畝の土地を占有し、パートやアルバイトを雇うが、自分で一部の野良仕事に従事した。「中農」は1戸に21.48畝の土地があり、自給自足で、アルバイトを雇うこともある。「貧農」は、1戸に2.83畝の少量の土地を持ち、主に土地を地主から借用しているが、少しの私有財産を持っている。「雇農」は土地や家などの何の財産も持っていない。このように、この時期、階級的土地所有の形態が広範に存在していた。

1949年の土地改革の際、村で成立された農民協会は、中央政府の『土地法大綱』および土地改革の政策によって、村の土地を平均的に村の人々に分配した。それによって、地主に土地が集中することが改善された。その詳細を表2に示すようである。

表2 腰站村土地改革前後の土地分配

	世帯数(戸)	人数(人)	改革前占有土(畝)	改革後占有土(畝)
地主	5	24	870	60
富農	9	31	370	82
中農	27	177	580	453
貧農	99	516	280	1360
雇農	17	69	0	145
合計	157	817	2100	2100

(張曉琼、何曉芳『満族—遼寧新賓県腰站村調査』59頁により作成)

## 2-3 1958年の人民公社

1958年の人民公社化によって、わずかの「自留地」(自分で自由に使用できる

土地)のほかに、当村の人々の土地や家畜などの財産が人民公社の共有化となった。その後の1960年からの三年の自然災害や、文化大革命の政治運動の高揚のために村民は農業に従事する積極性が低くなった。そのため、耕地が荒廃する現象が現れた。当村の人々の生活はあまり余裕がなく、限界的状況で生活していた。

#### 2-4 1982年の生産責任制

1958年人民公社設立から24年後の1982年、中国政府は全国的に生産責任制が実施された。その生産責任制とは、土地の使用権と管理権を30年の契約で世帯主に与えるものである。当村では、土地の分配が行われた。当時、村には四つのグループに分かれたので、土地はその四つのグループに分配した。各グループの人口が異なるので、人当たりの分配された土地も多少差異がある。そのうち、1グループの人当たりの土地は1.8畝、2グループ1.83畝、3グループ1.78畝、4グループ2.1畝になった。

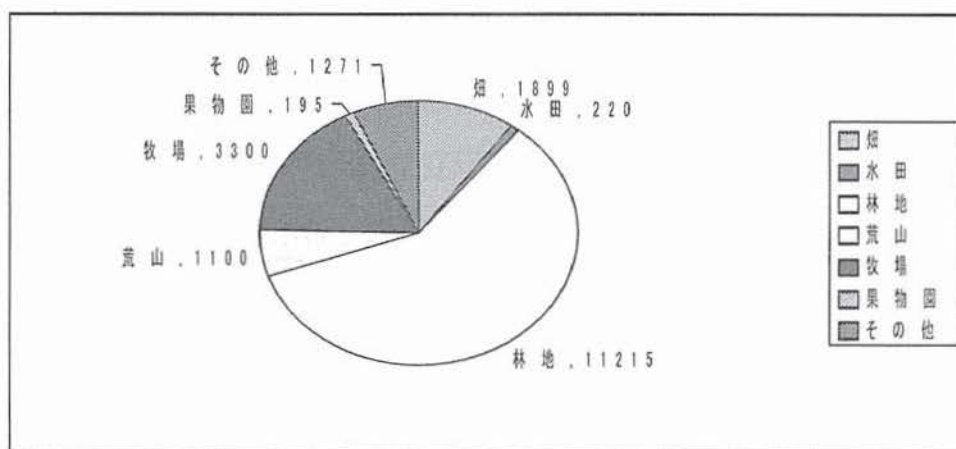
このようにして、当村では土地は共有地を残さずに分配された。村民は農業に従事する積極性が高まるようになった。現在までその制度は調整したことがない。当村の土地制度の変化はまさに中国土地制度の歴史的な変革過程を具現化した。

### 3. 経済生活

#### 3-1 生業－農耕

##### 3-1-1 農業

グラフ2 腰站村2002年土地利用情況 単位 畝 (1畝=0.992アール)



(張曉琼、何曉芳2004『滿族—遼寧新賓縣腰站村調査』18頁により作成)



腰站村の生業は農業を主とする。また、牧畜飼養、養殖業、商業、観光、運輸、建築、加工業などの商品経済が徐々に発展してきた。腰站村の総耕地面積2118.77畝（1畝は約0.992アール）のうち、畑は1898.4畝、水田は220.31畝である。一人当たりの耕地面積は約1.9畝である。作物は、玉蜀黍、穀物、大豆、じゃが芋などであり、毎年4、5月に種付けている。水稻は一毛作である。種付けの水田の面積が少ないので、米が自家消費される。玉蜀黍の一部は家畜の飼料とされるが、その他は販売されて、家庭の重要な収入の源となっている。新中国成立以来、腰站村の作物の栽培種類が変わっている（表3）。

表3 腰站村の栽培作物面積 単位：年、畝

年	小麦	水稻	玉蜀黍	高粱	粟	さつま芋	じゃが芋	大豆	落花生	ひまわり	亜麻	大麻	甜菜	煙草	西瓜	糖	野菜	他
1949	0	0	410	500	432	0	95	450	27			8			30		60	88
1958	0	615	281	313	410	0	75	774	29				37	34			271	38
1961	69	162	332	511	340	6	7	770	10			5	3	29	35		160	151
1966	0	14	914	461	344	0	14	324	6		2	10		34	16		18	95
1979	10	204	1132	90	96	0	101	662	43	1		9					107	33
1983	0	206	721	136	111	0	0	699							3	4	371	79
1999	0	176	987	10.5	6	0	22.5	900							15		15	
2001		180	930	9	6		60	870									60	
2002		180	1155	6	0	0	90	612									60	

（張曉琼、何曉芳『満族—遼寧新賓県腰站村調査』63頁により作成）

表3のように、腰站村では、1960年代まで、小麦、亜麻、大麻、甜菜、煙草は、小規模の試作を経たが、産量が低いので、栽培しないようになった。高粱、穀物の商品価値が低いため、徐々に減少している。しかし、玉蜀黍の栽培面積が次第に増加の傾向にある。水稻の栽培は1980年代以来、ほぼ変わらない。大豆が当村の主な植物油の原料栽培作物の中で第二位になる。野菜の栽培はほとんど耕地を使用せずに、家屋の周りの菜園を利用している。野菜の種類は白菜、ほうれん草、パセリ、きゅうり、大根、なす、トマト、長ネギ、にんにく、インゲンなどがある。野菜は春の4、5月に栽培されている。白菜だけは秋に栽培される。市場から遠いので、それらの野菜はほとんど自分で消費される。白菜とじゃが芋は村民

にとって長い冬の主要なおかずである。

### 3-1-2 農具（表4）

腰站村では、1970年代まで家畜を使った犁耕はほとんど行なわれておらず、生産性の低い鋤を主とした農耕を行っていた。腰站村の伝統的な農具は鍬、つるはし、鋤、鎌、馬鍬（まぐわ）、唐箕（とうみ）、篩（ふるい）などがある。それらの農具は今でも重要な役割を負っている。

機械は1970年代中期から農耕に導入された。畑の種まきと水田の田植えは現在でも人力に頼っている。脱穀機が1970年代から使われ始めた。その他、文化大革命以降、運輸用のハンドトラクターや小型のトラクター（三輪車）が増えている。

表4 腰站村の農機具の使用統計 単位：台

年		1949	1969	1976	1979	1990	2000	2003
耕作機	大中型トラクター	0	1	1	6	6	0	
	小型トラクタ	0	0	3	4	4	7	35~40
	ハンドトラクター	0	0	3	2	7	9	9
灌漑	重油機	0	0	4	4	6		62
	電動機	0	4	7	2	0		
収穫用	脱穀機	0	3	3	2	6	9	9
加工機	脱穀機	0	5	8	9	4	4	2
	製粉機	0	2	3	6	4	2	2
	脱汁機	0	0	0	4	6	10	2
飼料用機	飼料粉碎機	0	6	5	2	6	2	2
半機械化	手車	9	3	4	3	210	211	207
	馬車	2	14	6	7	240	135	120

（張曉琼、何曉芳『満族—遼寧新賓県腰站村調査』65~66頁により作成）

腰站村では、ほぼ1970年代から機械が使われるようになった（表4）。特に最近小型トラクターが、広く使用されるようになり、そのかわり、馬車が減少している。

### 3-1-3 家畜飼養

狩猟民族であった満州族は家畜飼養歴史が長い。腰站村では、家畜の種類は豚、鶏、アヒル、がちょう、山羊および大型家畜の牛、馬、ロバ、ラバなどがある

(表5)。

表5 腰站村の家畜飼養

年	1949	1956	1966	1978	1983	1996	1999
馬 (匹)	80	7	19	19	13	8	9
ロバ (匹)	30	47	32	8	5	10	11
ラバ (匹)	12	26	6	15	12	23	23
豚 (頭)	190	166	243	404	312	509	460
山羊 (匹)			97	95	120	450	210
蜂 (箱)		5	8	9			
鶏、家鴨、鶯鳥(羽)	310	395	370	913	309	9000	5400
牛 (頭)	75	58	102	127	116	430	383

(張曉琼、何曉芳『満族—遼寧新賓県腰站村調査』75頁により作成)

表5から、腰站村の家畜飼養数が各年代によって異なることが分かる。牛の例をあげると、1949年の75頭から1956年の58頭になった。その理由は、人民公社時代に村民は自分所有の家畜を人民公社所有に変えることを心配するので、こっそり牛を屠るのが多かったからである。1966年に始まる文化大革命時代に牛の飼養がやや増加したが、この時代に村民の個人による家畜の飼養は禁止されたので、牛の飼養数は大幅に増加していない。文化大革命時代後の1978年以降、政府の市場経済の実施によって、牛とほかの家畜の数量がどんどん増えるようになった。現在家畜の飼養の数量は、主に飼料と肉の販売価格の変化の影響を受けている。すなわち、飼料が安く、肉の販売価格が上昇すると、家畜の飼養量が上がるが、逆に、家畜の飼養量が下がる。

豚は畜舎飼育で、30～40戸に飼養されている。牛と山羊の飼養は放牧と畜舎飼育である。現在村では牛を飼育する世帯は40戸ぐらいある。20頭～30頭の牛を飼育する家庭は最大規模に属する。5～7戸の家庭は山羊を飼育している。牛と山羊は政府の規定の牧場で放牧ができる、11月～翌年の5月まで畜舎飼育をしている。前述のグラフ2には牧場は3千畝と統計した。しかし、筆者は村で調査の際、牧場が1つも見つからなかった。その理由は家畜の放牧にはほとんど荒山、荒地を利用するからである。大型の馬、ロバ、ラバは1996年以降、三輪車に取って替

わられたので、その飼養数は年々減少している。

### 3-1-4 果樹栽培

腰站村には畑と水田のほかに195畝の果樹園である。果樹の種類はりんご、さんざし、梨、葡萄などがある。腰站村の果樹栽培の詳細は次の表のようである。

表6 腰站村の果樹栽培面積、生産高

年	栽培面積 (畝)						生産高 (トン)					
	林檎	梨	葡萄	山楂	他	合計	林檎	梨	葡萄	山楂	他	合計
1996	45	45	1.5	124.5	15	231	3	4	1	3	1	12
1999	45	60	3	120	15	243	3	4		1	2	10
2001	45	120	3	15	12	195	3	4	0.4	1	1	9.4
2002	45	120	3	15	12	195	3	4		1.5	1	9.5

(張曉琮、何曉芳『満族一遼寧新賓県腰站村調査』74頁より作成)

表6は腰站村の1996年から2002年までの果樹の栽培の面積と生産高である。この6年間、りんごの栽培の面積と産量はほとんど変わっていない。梨の栽培面積は増加の傾向がある。それは梨の商品価値が高いからである。さんざしの栽培は、商品価値が低いので徐々に減少している。

これらの果樹は主に10世帯によって個人的に経営されている。果樹栽培用の林地使用权と管理権は1982年後の生産責任制の導入によって、畑と同じく、30年の契約で家長一人に与えられた。果樹栽培からその各世帯は年に2万元(30万円弱)の収入を得ている。果樹栽培の収入は、畑と水田の収入より多いために、今後果樹栽培に従事しようとする人が10世帯いる。

### 3-1-5 林業

腰站村の林地は11,215畝である。新中国成立前に乱伐のために原生林が厳しく破壊された。新中国成立以降、政府の森林の保護政策によって、村の林業が展開され、1950年代から植林活動が始まった。そのため、人工林が増えてきた。

樹木は常緑針葉樹の赤松などの松類および杉などを主としている。1970年代以降には、落葉広葉樹の樟(クスノキ)、クルミ、エンジュ(俗称、アカシア)、針葉樹の胡桃などが植えられるようになった。

林地の所有権と使用権はほぼ国家所有であるが個人所有の林地もある。

### 3-2 他の副業

#### 3-2-1 農産品の加工業

1960年代まで腰站村の農産品の加工は石臼で作られた。その後、機械が導入され、現在では、水稻と玉蜀黍の脱穀機、製粉機械、大豆と玉蜀黍で汁を作る脱汁機がある。

現在、村には農産品加工に従事する世帯が2戸ある。

#### 3-2-2 養魚業

腰站村を流れる五竜河と、蓮花山から流れる小川は、養魚のための豊富な水源を提供している。村の老人によると、かつて、1キロぐらいの天然魚が河の中を泳いでいたが、農薬、肥料の使用や家庭汚水の汚染のため、現在では、わずか1センチぐらいの小魚がたまに見られるだけである。村の1世帯が2003年から養魚業に従事し始めた。家の前の養魚場で600匹ほどの淡水魚を養殖し、年に約4～5千元（約7万円）の収入を得ている。

#### 3-2-3 酒の醸造業

腰站村には2000年に酒を醸造した家庭は2戸あったが、競争の結果、1世帯になった。酒の原料は玉蜀黍で、村で購入する。酒の産量は年に7トンである。夏は暑くて、酒が醗酵しにくく、質が落ちるので、夏には酒を造らない。

#### 3-2-4 漢方薬の原料の収集

腰站村の回りの山や丘陵には、漢方薬に適する野生植物が約10種類芽生えている。村の人々、特に女性たちは山でその植物を採って、乾燥させてから売る。市場までは遠いので、村民は直接に乾燥させた植物を村内の漢方薬の原料の収集に従事する人に売る。漢方薬用の野生植物の採集によって、村民は一部の収入を得る。

現在村に漢方薬の原料収集に従事する世帯は1戸ある。彼は町の漢方薬会社の代理人である。

#### 3-2-5 山菜の採集

村を囲む山には豊富な野生果物、山菜がある。野生果物は山梨、山すもも、山さくらんぼ、山ぶどう、山クルミ、山ゴマ、山もも、山ハシバミ、山どんぐりな

どである。

山菜は、きのこ、シイタケ類4種、シダ類であり、その他、日本語で翻訳できない種類が10種類以上ある。山菜を採る仕事を負っているのは村の女性たちである。

山菜によって、村民は一部の収入を得る。また、冬の農閑期に、勤勉な男は山へ枯れた木の枝を拾って薪として売る。

### 3-2-6 建築業

腰站村では、2000年前後から建築に従事する人が現れた。建築に従事する人々は7組に分かれている。その責任者は村内外の仕事を請けて、村の人々を雇う。雇用者の一日の給料は20元（約300円）ぐらいであり、比較的低い。一方、責任者の収入は比較的高く、村の中流以上の収入レベルに達している。

### 3-2-7 商業

腰站村では、新中国成立の前後、生活用品を天秤棒で担いで村へ売りに来る行商人が存在し始めた。しかし文化大革命の最中、その行商活動は禁止された。1980年代の改革開放以降、その行商人が再び村に現れた。現在行商人は毎日村で販売活動をしている。今では、販売用の天秤棒は手車に変わった。

筆者が一番驚いたのは、村で行商人が売った商品がお金を使わず、村で作られた農産物と交換できることである。筆者はほかの満州族の村でこのような物々の交換という商売活動を見たことがない。

腰站村には小売店が4店ある。この売店では、主に日常生活用品を売っている。その売店では、現金による取引が行われているが、店主が忙しい時には、客は自分で料金を計算してお金を払うことがよくある。そこに村の純朴な民風がみられる。

### 3-2-8 運輸業

前述したように、腰站村では、近年馬車は次第に減少している。そのかわり、運輸業用の小型トラクター（三輪車）が増加するようになった。運輸業を営んでいる家庭は35戸～40戸ある。

しかし、村には人を乗せる乗り物が一台もない。普段村から5キロぐらいの町へ行くときは、村を経過する外村の人力車を待たなければならない。

### 3-2-9 観光業

腰站村は満州族の民俗村として1999年に撫順市に観光の村として指定された。村では、10戸の民宿がある。民宿の値段は一日一泊食事つきで35元（約500円）である。当初、観光業が村の人々は観光によって収入をもたらした。しかし、競争の結果、客数がだんだん少なくなってきた。現在では少数の客がたまに来るだけであり、観光業は成り立たない。

### 3-3 収入と支出

このように、腰站村の経済構造は、元来単一の伝統的な農業から家畜飼養、林業、果樹栽培養殖業、漁業、農産品の加工業、建築業、運輸業、観光業、山菜採集などに変ってきた。しかし、大多数の家庭は農業を主な生業としている。農業以外の副業に従事する家庭は、村で少数である。村民たちの半分以上の収入は伝統的な農業に支えられている。2002年の統計によると、村民の1人当たりの収入は、1200元（2万円弱）であり、低収入のレベルに属する。そして、村内の貧富の差が大きい。単純に農業を営んでいる家庭の収入は低い。これに対して、農業と他の副業で生計をたてている複合型生業に従事する家庭の収入は比較的高くなっている。

村民の支出については、消費内容がだんだん多様化している。種子、肥料の購入などの支出のほかに、家庭用電気、通信などに用いる支出が増えた。今各家庭には白黒あるいはカラーテレビがある。福裕な家庭は冷蔵庫、洗濯機、ガスコンロ、自転車、原付、小型トラクター（現地語で「三輪車」と呼ばれる）を持っている。

もうひとつの支出は電話代である。村では60%の家庭が電話を持っている。その電話代は月に20～30元（300円～500円に当たる）である。少数の村民は携帯電話を持っている。

日常生活の支出のほかに、贈与交換の支出がある。村民は冠婚葬祭に用いる支出は年に約3、4千元である。また、教育費の支出として、村民は、年に小学生300～400元、中学生2000元、高校生3000～4000元、大学生7000元がかかる。特に大学生がいる家庭の家計は、ほぼ赤字状態である。

## おわりに

これまで、本稿は、腰站村の自然環境、土地所有制度、経済生活について述べた。当村は山あり、川あり、平野ありの世界である。当村落では、その自然の地域的多様性、生活様式の多様性を呈した。すなわち、多種多様の自然環境に恵まれ、伝統農業の他、家畜飼養、林業、農産品加工業、運輸業、建築業、養殖業、商業、観光業、漢方薬の原料収集、山菜の採集業、酒の醸造業など多様化の経済生活を示している。それにもかかわらず、当村の人々の生業経済は農業を主にしていることが明らかになった。

他方、当村の土地所有制度は中国土地制度の歴史的な変革過程を具現化した。さらに、腰站村の多様化の生業経済は中国の社会環境の変化の過程を反映した。すなわち、文化大革命時代までに、調査村の生業経済は主に単一の農業を主にしていた。政治運動を中心としたために、村民は農業に従事する積極性が非常に低くなった。それゆえ、村人の生活はあまり余裕がなく、限界的状況で生活していた。しかし、文化大革命以降の1980年代になると、中国政府は生産責任制や市場経済が実施された背景下に、当村では、生業経済は単一の農業から先述の多種多様の副業に発展するようになった。それによって、村人の生活は文化大革命時代より改善されるようになった。

大平原地帯で生まれた筆者はこれまで上述の調査村の他、遼寧省に隣接した北側の吉林の満州族の村落をいくつか調査を行ってきた。それらの村落は本稿の調査村の山村と異なって、平原の世界である。中国東北地域の山村と平原という村落構造の比較研究は稿を改めて論じたい。

## <謝辞>

本研究は、富士ゼロックス小林節太郎記念基金と笹川科学研究助成を受け、調査を実施したものであります。この場をお借りして、衷心より感謝の意を表します。

## 引用文献

### ① 和文：

和田清 1955 『東亜史研究』 東洋文庫



- 愛新覚羅・顕琦、江守五夫1996『満族の家族と社会』 第一書房
- 辻康吾・中野謙二・武吉次朗編2002 『中国省別ガイド3—遼寧省』、弘文堂
- 嶋田義仁2005「乾燥地域における人間生活の基本構造」、地球環境V01.10 N0.1 3-16  
 頁、国際環境研究協会
- 2000「風土の思想の可能性—日本的な根源的反省」、『「根拠」への探求—近代日本の宗教思想の山並み』、晃洋書房
- 米山俊直1990『アフリカ農耕民の世界観』、弘文堂
- 1989『小盆地宇宙と日本文化』岩波書店
- 大野盛雄1983『アジアの農村』東京大学出版会
- 費孝通著・小島晋治他訳1985『中国農村の細密画—ある村の記録』研文出版
- 石田浩1986『中国農村社会経済構造の研究』晃洋書房
- ② 漢文：
- 張曉琼、何曉芳2004『満族—遼寧新賓県腰站村調査』雲南大学出版社
- 新賓満族自治県概況編集組編集 1986年『新賓満族自治県概況』遼寧大学出版社
- 曹文奇 1999 『新賓名勝古跡要覧』撫順市新聞出版局
- 趙広慶・曹徳全 1995 『撫順通史』遼寧民族出版社
- 撫順市政協文史資料委員会編集2003『撫順覽勝』吉林摄影出版社

---

1 中国政府は少数民族問題を解決する政策の一つとして、少数民族区域自治の方針を採用してきた。1954年の憲法において、少数民族自治地域を自治区、自治州、自治県、自治郷が設けられ、特定の少数民族がある程度集中して居住しているところとみなされている。

(よう こう 比較人文学)